
あなたは殺し屋これは幻か。

男肉団長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは殺し屋これは幻か。

【Nコード】

N4666F

【作者名】

男肉団長

【あらすじ】

なんてことない少年吉田は、サッカーに明け暮れながら恋をしたと思う高校2年生。青春も性春も関係ないとばかりに走り抜けようとした夏休み、友達に誘われて夜な夜なクラスの仲間と肝試しに出発すると…気付けば吉田は南米のジャングルだった。

第一話『僕の独白顔面蒼白』

僕の名前は吉田タクミ。

なんてことない高校2年生だ。

もちろん、第二次性長期真っ盛りな僕は色々やりたいことがいっぱいあるわけで…。

例えば、部活のサッカー。やっと、やっとレギュラーになれた。小さい頃はサッカー選手になりたいなんて思ってたけど中学になって身の程を知る。そして、この素晴らしいスポーツを一生趣味にしようと思ったりしながら案外上手くいったらサッカーで大学とかいけないかな？なんて思ったりしてる。

次に、バイト。部活があるおかげで全然できないが…漫画喫茶とかで働けないかと思ってる。なぜなら、俺は漫画がとても好きだ。ついでに言うとゲームも好きだ。アニメは見てると案外疲れることに気が付きあまり見ないことにしてる。好きなきに辞めれる漫画やゲームが一番だ。だから、セーブが好きなところでできない感じのゲームは嫌いだ。って。どうでもよかったか。

とにかく、バイトして金を溜めたい。我々高校生にとって金つてのは幾らあっても素晴らしい砂漠のオアシスのようなもんだ。

次に…、これが一番大切なのだが…女の子と付き合いたい。だって、第二次性長期だ。もう、クラスの女の子が夏服になるだけでこっちは限界なのだ。リミッターは解除寸前なのだ。中学生の頃何回か告白された事もあった。しかし、中学生の頃の俺の精神は未熟そのもの。言い換えるなら女の子と一緒に居るのをからかわれるのを恐れた悲しい a boy なのだ。

誰が俺を責めれる？中学生男子ってのはそんなもんだ。ちょっぴり心が幼かった僕は特になんだ。仕方ないんだ。

そんな僕も高校生になって思春期真っ盛りなわけだけど…こんな来てほしい時に限って女の子は告白してくれない。世の中ってのは、

人生つてのはよくできてるぜ全く…。

サッカー部のマネージャーはもうすでに部長と付き合ってる。無理だ。

部活に、バイトに、恋に…なんとかしてこの思春期三種の神器を極めたい。

もうすぐ、夏休み…。

17歳の…人生にたった一回の夏休み。

とにかく…ぶちあげだぜ！

こうして、俺の人生で一番長い夏休みが始まった。なんともベタな始まり方なのは…そりゃあ、どこにでもあるお話しだからだろ？

第二話『夜の飛行場僕と妹』

ジリリリリリ……

目覚ましがうるさく鳴り響く。目を覚ますと、まだ窓の外は暗い。びっくりした。

本当にびっくりした。

目覚まし時計を見るとまだ夜中の3時だった。こんな時間に起きて何をするのか。

僕（吉田タクミ）は別に修験者でもないし、お百度参りを踏むわけでもないし今から美味しいラーメンのスープの仕込みだってばよ！ってなことにはなりもしない普通の性少年であり青少年なんだから是非もつと寝かしておいてほしかった。

それも……やつと夏休みに入ったのに……。夏休み早々運が悪い。運が悪いっていうか、こんなのおかしい。何が悲しくて目覚ましを朝三時にセットしなければいけないのか。気でも狂ったのかと自問自答するが、どうも記憶にない。

正直言って……犯人はわかってるんだ。

妹だ。

僕の妹は、2歳年下の15歳。中学3年生で今年は受験なわけだ。受験生。といっても、僕の時とは違ってそこそこ勉強ができるっぽい妹は何を焦るわけでもなくマイペースに日々を送っている。

僕にこんな悪戯ともいやがらせとも言えるような悪さを働きながら。

本来なら、右のコメカミあたりに懇親の右フックでもお見舞いして兄からの愛のDVを食らわしてやりたいところだけどそういうわ

けにもいかない。
おのれ、妹め。

そして、こんなことわざわざ書く事でもないが…妹と僕は血が繋がってない。

母の連れ子だ。

本当のお母さんは、僕が小さい頃に父と離婚したらしい。経緯は良く知らないし、知りたくも無い。

僕が6歳のとき、父が今の母と再婚した。

すると、オマケがついてきた。妹だ。

僕は、雑誌でもお菓子でもオマケや付録が大好きだった。ヤマオリとかタニオリとかしながら作る付録が大好きだった。母に付いてきた付録は折ったり貼ったりするところはなかったけど、非常に嬉しいオマケだった。

僕は、兄弟が欲しかったから。女の子でも、そこは無問題だった。

年がすぎると……妹は、非常に美しく成長した。

ハッキリ言って……可愛い。多分、学校でもトップ3に入るくらい可愛いだろうしこの町でも相当上のランクだと思う。

ギリの妹が、ベッピンさん。しかも、仲は……悪くない。心底僕が憎くてこんな悪戯をしてないのなら、仲は悪くないと思う。

いかんせん、こんなまさかのドキドキ義理の妹との恋愛フラグが立ちそうなことを話してはいるがそんなことは、ないから安心してほしい。もし、あったとしてもそれはまた別のお話なんだから。

ってなわけで、義理の妹の胸でもいつか触ってやろうなんて思いもしてない僕は朝三時からやることもないわけで……始まったばかりの夏休みの宿題に手をつけるなんてことは目の前でビッグバンが起こっても嫌だし。

かといって……こんな時間からゲームする気にもなれない。漫画も、今はいいや。

ふらりと何気なく部屋から出る。

そんなに大きいわけではないが一軒立ての家だ。父も頑張ったものである。

僕の向かいの部屋が妹の部屋。扉にシールが貼ってある。

「ノービアー、ノーワーク」だそうだ。

ビールがないと働かないってか？

なぜ、こんなシールを貼ったのか少し脳みそをチェックしてやりたいが。

きっと思春期の女の子にも色々と事情があるんだろう。

一階に下りて、台所でオレンジジュースを飲む。

果汁30%！

今日も、9時から練習だ。昼まで。

そこから、本来なら好きな女の子とデートでも行けたら最高なんだが……。

どうせ、同じく朝から練習してるであろうバスケット部の田中^{バカ}とラグビー部の西植^{ひだひはなへくし}と三人でぶらつくのかな……。

ちなみに、この2人は同じクラスなのだ。

部活は違うが、まあ学校で一番仲のいい友達って言っても過言で

はない。彼女もいない。頭もそんなによくない。田中は、むしろ相当悪い。

まあ、相違点としては、奴らは2年にして部の絶対的エース。僕はなんとなくレギュラー。こんなもんな。

部屋に戻り、もう一眠りすべきか、ここで眠った場合確実に練習に遅刻してしまうフラグがビンビンに立ってるのかどうか、それこそ悪の組織に世界を亡ぼすほどの兵器を作れ、さもなくば家族を皆殺しにすると脅されている天才科学者ばりに僕は悩んでいた。

ここでもう一眠りしとかなないと練習に身が入らない。が、遅刻したら練習もへったくれもない。

うーん。

どうすっかなあ……。

ん？

何気なく携帯を見たら着信。そして、メール。

俺が寝てから来たのか……。

着信は、田中（超バカ）からだった。メールでもある。ふむ。。

メールをチェックすると……

『明後日は学校がなんかのチェックで使えないから部活ないだろ？ってなわけで、明日の晩五三時…肝だめしを開催します！！えー、絶対参加してください。』

なにが、ってなわけで……なのかはわからんが明後日、っていう

か明日か。今からだ。明日は学校が使えないのか。そういえば顧問もそんなことを言ってた気がする。

肝だめしねえ……。

正直言つて、全く、ビックリするぐらい興味がわかないが。

『なお、同じクラスの何人かに声をかけてまして……あなたの大好きな大好きな井筒さんもきますよ。それでは、返事は聞きません。だって、お前は必ず来る……そして……死ぬ……』

行こう。ビックリするぐらい興味しかわかない。

もちろん、井筒さん（天使）に。

死ぬのは嫌だが、井筒さん（ある意味僕を堕とす堕天使）と会えるなら寿命が3ヶ月ぐらい縮んでもうっすら我慢できるぞ！

ちなみに、この井筒さん（Bカップ）というのは、まあ、ほとんど主成分がエンジェルで出来てる女の子で、はつきりいうと僕の片思いの女の子だ。図書委員だ。もちろん、物静かで読書が好きでもちろん眼鏡をしていて、もちろん語尾はくですう、くですうかあ？、くですう、って微妙に伸ばす感じでもちろん天然ボケを発揮するところがあるのに変なところで頑固っていう非常になんていうかもう恋愛シュミレーションゲームライクな女の子だ。

もう、男でこれが嫌いなやつは、いるかもしれないが俺には関係ない。ドキュンだ。ズンズンドキュンだ。DQNじゃないぞ。そんなこといったら殺す。もう、僕の心のど真ん中をとびっきりのストレートで決めてきましたね？ってなもんだ。

井筒さん（アホ毛あり）が来るのなら……僕は行かねばならない。肝だめしても根性だめしてもどんとこい！

そして、なんやかんや上手くいったら……ふっふっふ。

そして僕は、今夜のパーティーナイトのため、颯爽と寝る事を決意した。

クラブの練習より……恋だバカヤロウ！

思春期ばんざー……………い！

そして、起きたのは勿論お昼の12時で部活の練習をあっさりさぼることになったのであった。

第二次性長期ばんざー……………

……………い！

第三話『するぜ用意飲むぜ糖衣』

「ふあああ……」

僕はあくびをかみ殺しながら台所に向う。

妹の悪戯と、思春期の恋心のおかげですっかり寝坊した。もう、今更練習に出たところで学校に着く頃には皆が帰り支度をしてるころだろう。

今日は、ちよっぴり体調不良だつてことで許してもらおう。

「あ、お兄ちゃんおつはよー。よく眠れた?？」

妹が純真無垢な笑顔で聞いてくる。本来ならここで鉈かなにかを使つて腹を横一文字に切り裂いて腸を取り出して天に掲げてあげるのが兄の正しい在り方なのだろうが……

「おう。もう今ままでぐつすりだ!」

このセリフに妹が、おかしいな?と言いたげな顔をする。やはり、こいつがクロだったか。

「まあいいや。あ、お兄ちゃん。お父さんとお母さんはもう仕事出たからね。ご飯、これ。」

「うお……なんじゃこれは……」

妹が差し出してきたのはなんらかの黒い塊であつた。

なんじゃこれは。この世の悪意とか瘴気みたいなのを具現化して固めたのか?

「いやー、朝からハンバーグ作つてみたらちよつと焦げちゃつてへ」

「ちよつとじゃねーだろ! 真っ黒とか通り越してんぞ! 夜よりも深い黒じゃねーか!」

「あ、詩的な例えだね! お兄ちゃんかつこいー」

こいつには何を言つても無駄だ……。まあ、可愛いから許すが……いかんせんこのハンバーグを食つたら確実に寿命が短くなる。死亡フラグがこんなに身近に立ったのは初めてだ。

「とりあえず、食べといてね！ 私今から図書館行って来るからねー。んじゃ、後片付けは任せた」

「おい！ 自分のぶんぐらいは……」

妹は、ウインクしながら走り去る。

そして、僕の目の前には妹の食べ終わった食器、そして黒い悪意の塊が残るだけであつた……。

食後、文句を言いながらもすっかり後片付けをする僕は偉いと思う。

何気なく、テレビでもつける。夏休みということもあつてか、ちびっこ向けなアニメが再放送してる。

そんなにアニメを見る方ではなかったが……懐かしいものもあつた。

ふむ。

ちよっち、時間の潰し方に困るな……。

ダラダラとこのまま懐かしのアニメを見るのも悪くはないが……せつかくのいい天気。夏休み。勿体無いといえば勿体無い。

かといって……どこかに行くつても……あてはないし……。

なにより、今日の丑三つ時イベントのために体力を温存しておかなければならない。

そついえば……詳細は全く知らないのだが……。後で田中（頭悪すぎ）に連絡でもすつか……。

一応眠つておこうか、それとものんびり漫画でも読みながら時間を潰すか……。

そんなこんなで漫画でも取りに行こうとしたとき、都合よく電話がかかってくる。

都合よく、田中（偏差値2）だった。うむ。すごい、都合がいいな。

『あーもしもし、俺俺。』

「俺俺詐欺ならお断りだぞ。」

『ばっか！ 違う！ 俺俺、田中だつての！』

「携帯なんだから見たらわかるよ。俺も後で連絡しようと思ってたところだから丁度いいや。あのさ、今日の肝だめしのことなんだけど……。」

『おお、俺もそのことで電話したのよ。とりあえず、待ち合わせは昨日もメール入れたけど2時な。丑三つ時だぜ！』

この、謎のテンションに少し頭痛がする。

『あ、あと、来るメンバーなんだけど井筒さんのほかに山田や小谷とかもくるぜー。』

「マジかよ。すごいな。。。」

山田さんと小谷さんつてのは……うちのクラスの女子で、まあ誤解を恐れずに言うとなんかの綺麗どころってやつだ。はつきり言えば可愛いのだ。

『男は俺とお前と西植と……あと何人かくるわ。もちろん女子もな。』

「結構集めたんだな？」

『せっかくの夏休みイベントだし、たくさんの方が案外盛り上がるし、なによりこそーっといなくなっても目立たないだろー。タクミちゃん』

「ああ、お前が誰かに殺されてバラバラにされて埋められても誰も気付かない」

『くわー。せめてタクミちゃんは気付いてほしいね！』

「とりあえず、2時に何処待ち合わせだ？」

『とりあえず空港の近くのコンビニあんだろ？ あつこの前で待ち合わせることになる。』

「あいよー。」

『あ、結構ややこしいところ通るかもしれないからサンダルとかじ

やなくてスニーカー履いてこいよ。あと、何か面白グッズな！」
「お前がややこしいって言う所なんて絶対に行きたくないが……了解した。じゃあな」

電話を切る。

なんとも、思いのほかでかいイベントだったようだ。クラブに行ったら学校の友達とは夏休みでも会える。同じクラスの子も大抵はなんらかの部活に入ってるし……会えるっちゃ会える。

でも、それは夏休みでも皆は制服なのだ。まあ、学校なんだから当たり前だが。夏休みといえど制服だと、いつもと同じで味気ない。しかしこうやってプライベートで皆が集まるとなると、私服だろうし、ちよつとドキドキするな。

間違つてもダサいなんて思われたくないぞ……でもまあ、夏だし……デニムにシャツとかだけで。

っていうか……面白グッズ??なんだそりや?
なんだろう。らっきよとか?

……ううむ。なんでもいいか。日の丸の旗でも持っていてやろう。おおいに邪魔になりそうだが。
空港、か……。

どこの町にも、どこの学校にも、七つ不思議やら怪談やらがあるもんだ。もちろんそれは僕の町も例外ではないわけで。

いわく、町外れの丘の上にある潰れた廃ホテルには恋人とのいざこざで飛び降り自殺した女の霊が出る。

いわく、満月の夜に市民プール近くでチュパブラがでる。

いわく、稲荷神社に三日間毎日おいなりさんを持って行って願い事をすれば、結構叶う。
などなど。

三つ目のとかは結構って言うてるあたりがミソらしい。ちょいちょい、はずれるってことだね。わかります。二つ目のチュパブラってのは、プエルトリコの妖怪みたいなもんさ。気になったら辞書で調べろ！

そんななかに、飛行場の話がある。まあ、空港だ。

うちの町には一応、飛行場がある。といっても、国内線なんかを細々と走らせてる小さな空港だ。いまだにプロペラ機が飛んでたりする。国内どころか、なにか次元の違うところに飛んでいつてる感じだ。プロペラで……。

まあ、小さなセスナなんかも飛ぶ。小さい頃は結構飛行機を見に行ったりもした。ガキってのは、ああいうのに弱いもんさ。

そんな、こじんまりした空港だが僕が中学生になったあたりだろうか。とある事件が起こった。殺人事件だ。

すごく身近で起きただけによく覚えている。

空港近くに住む老夫婦が殺された。犯人は、強盗目的で家に忍び込んで見つかって、殺したらしい。そしてあるうことかバラバラにし、その老夫婦の遺体を空港の中のクローバーだらけの土地に埋めたんだとか。

犯人は捕まって警察に洗いざらい自供した。そして、自供した場所に、クローバーのしたに遺体は確かにあった。

一人だけ。

腐敗していて、バラバラになった遺体は見た目にどちらかはわからなかったそうだけど後にそれは奥さんだったことがわかった。

ならば、夫は？

犯人は間違いなく2人をそこに埋めたと言う。しかし、出てきたのは奥さん一人。

死人は、一人で動かない。バラバラになった遺体は歩けない。

夫は、バラバラになりながらも奥さんを探して歩きさまよってるらしい。毎日。夜になると。埋められた日から、毎日、昨日も、今日も、明日も……。

……なんていう怪奇ホラー。

しかし、この話も何処まで本当だろうか。実際にニュースになったのは老夫婦が殺されたつとこまで。空港近くで遺体は見つかったらしいが……片方の遺体しか見つからなかったとか、そのあたりは正直本当かどうかはわからない噂話だ。

でもまあ、火のないところに煙は立たないっていうし。思春期の僕達には充分刺激的な話ではあったので、語り継がれているわけだけど。

一応、塩とか持ってたほうがいいかしら……。っていうか、老夫婦、こんな遊び半分で行ってごめんなさい。でも、好きな子が行くっていったんだから……。僕は……。ある意味真剣だ！成仏してくださいまし。

僕は、南無阿弥陀仏とつぶやきながらいそいそと自分の部屋にもどり用意をして眠りにつくことにした。一応、たくさん寝とかないとなー。オールになる可能性が高そうだし……。

寝つきがいいのが、僕の唯一の取り柄である。

何が言いたいかというと、もう、寝たってこと。

さあ、起きたら、空港近くのコンビニへ……。GO!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

第四話『これは夢？生きる術。』

夜中に家を飛び出し空港近くのコンビニに行くと……そこはもぬけのからだった。

それは、当たり前だ。

なぜなら、僕は、思いつき遅刻したからである。
なんだかんだでぶ

西植から電話がかかってくる。

「吉田！なにしてるんだな！？もうみんなとづくにむかったんだな
！」

「すまん。思いつき遅刻してしまった。」

「とりあえず、一人吉田のために待ってて貰ったんだな。感謝するんだな！僕らに！」

「ん？そんなことしないでいいのに。つてか、誰もいないぞ。」

「きつと、コンビニの中で待ってるんだな。感謝するんだな。」

何を感謝しろと……ん！？

目を疑った。

コンビニの中にはジャージ姿の……井筒さん（女神）がいた！

「西植さん。感謝します。」

「うむ。当然なんだな！それじゃあ、空港の中に入るためのフェンスが壊れてるところは知ってるのかな？」

「ああ、確か四つぐらいあったよな。わかってるぜ！」

「それじゃあ、うまくやるんだな！また後でなんだな！」

西植（神）に感謝する。こうやって、井筒さん（ヴィーナス）と二人で夜な夜な歩くなんて……。奇跡という言葉すら生易しい！

ちなみに、この西植ユツドのいかにも貼り絵とかが上手くてランニングに半パンな感じの喋り方は、別にキラってわけじゃなくてトランプの罰ゲームで今年いっぱいあの喋り方でいかないといけないってだけってことを補足しておこう。

井筒さん（愛の妖精）は僕に気づくとポテポテとコンビニから出

てきた。

緊張する。

「ああ、吉田くん、こんばんわあ」

「あ、ああ……。こんばんわ。」

「吉田くんが遅くなさったので、私がこうやって待つようにとの支持をいただきまして、その、吉田くんが無事にこれでよかったですう。」

「ん。んじゃ、行くぞ。」

「ああ、ああ、待つてくださいい」

俺は、本当は抱きしめたい彼女を前にすると、こんな態度を取ってしまう。

だって、仕方ないだろ！？思春期ってのはこういうことなんだよ！こんな僕を誰が責めれる？神様だって責められやしない。

せめて井筒さん（恋の精霊）に、待たせてごめんねって心から言いたいのに……。言えない。自分で自分をぶっ殺してやりたいぜ！

「そつえば、吉田くん。どこから入るのかわかってますかあ？」

「ああ。」

なぜだ。

こうやって話をふつてきてくれるのに、何故こんなつつけんな返しかできない！

俺の馬鹿！

「私、こんなの初めてなんですよお。だから、ちょっとドキドキしてるんですう」

嬉しそくに話す井筒さん（満点の星空）。こんなの初めてって言葉に心も体も反応してしまう。

本来、こんな態度を取っていたら嫌われてるとかって思われてもおかしくはないのだが……。彼女はちょっぴり浮世離れしてるところがあるから助かった。

「ところで……。吉田くんに聞きたいことがあるんですがあ……。」「ドキっとする。」

一体俺に何を聞こうと……？

「あのお……あれ……なんでしょうかあ……」

ふいつと指差す先には……目前まで着た飛行場。

そして、一面に広がるパトカー！

パトカー？

「これってえ……もしかしてえ……」

ふむ。

もしかしくなくても、これは、答えは一つではないだろうか。

これは……

『えー、飛行場に忍び込んだ者達につぐ！ たちに出てきなさい！』

おうおう。いい感じに拡声器なんか使われて。夜中だぞ。

っていうか……ここまでされるようなものなのか！

もしかしてこの空港には自衛隊の機密的なアイテムがあったり……

……？

「どうしようかあ……」

「どうしようかってもなあ。。確かに、みんなのことだもんな。」

「うっん……どうやってら中に入れますかねえ」

井筒さん（まるで薔薇）はこんな状況においてもまだ中に忍び込もうというのか。なんていうゴツド。

一人なら迷わず即決で家に帰るところだけどあなたが行きたいなら……どこまでもついて行きますよ！

しかし……このまま飛び込んでいってもすぐに捕まるだろうな……。ほぼ間違いなく。

まだか田中たちもここまで警察が躍起になるとは思ってたんだろう。僕だって、見つかったらもう厳重注意ぐらいですむと思ってた。

まあ……不法侵入なんだから当たり前か。

「ああ！何か忘れ物を取りに来たって言うのはいかがでしょうか。」

「

手をポンつと打ちながらそんな素晴らしい案を提案する井筒さん（八重歯）は何故だかとても楽しそうだ。

「無理だろ」

いや、その案でいきたいんですよ！？でも、恐らく無理なんですよ……。怒らないでください僕のマイエンジェル。

「じゃあ、風に飛ばされてやむなく入ってしまったっていうのは」
「却下」

なんですかそのプリティーな案は！それでいきたいのはやまやまなんです、人間はなかなか風に飛ばされたりしないんです！

ここはどうするか……。とりあえずグルリと回ってみるか……。でもこんな夜中にうろろしてるのが見つかるだけでも結構致命的な気がするな……。

そもそも、中に入ってるのが高校生だったのもばれてるのかな？高校生だつてばれてたらここまで大事にはならないか。もう、頭がパニツクになってくる。

そんな折、ふと井筒さん（基本的には髪はくくらない）を見るとなにやら紙やらダンボールやらをどこから拾ってきて集めている。一体何を？

あ！携帯でとりあえず中と連絡してみよう！そうすれば……。パチパチパチ。

なにやらパチパチといい音がする。拍手でもしてくれてるのか？音のするほうを見ると。

井筒さん（英語が得意）が拾ってたものを燃やしていた。

ああ、なんだかキャンプファイヤーみたいだなあ。

つて！

おいおいおいおいおい！

ちよつとちよつとちよつと！？

「あららあああ！警察のみなさああん。大変ですう。火事ですう。」

「
おいおいおいおいおいおいおい！

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！
おいおいおいおい！

ガヤガヤと警察たちが騒ぎ始める。しかも、案外火は強く、そして
範囲が広がってきた！井筒さん（髪はちよつと茶色）！？

「さあ、よしだくん。いまですう。」

「え、あ、ちょ……」

井筒さん（お弁当がやたら小さい）が僕の手をとって走り出す！
そして、警察たちがやんやと騒いでるあいだにまんまと空港内に
忍び込めたのであった。

「なんとかうまくいきましたねえ」

「む、無茶するなよ！」

「ただの陽動作戦ですう」

陽動。ゲームの中だけではなく実際に使うことになるとは。

もうとにかく、好きな女の子がここまでやってんだから僕も覚悟
を決めるしかない！なんの覚悟がよくわからないけど！

それにしても……これからどうしたらいいんだろう。

「とりあえず、皆さんを探しますかあ？」

「そ、そうだな。」

本来なら僕がリードしてあげないといけないようなシチュエーシ
ョンだが、しっかりと手綱を持たれている感じ。こんなときは案外
女子のほうが根性座ってるものなのか。

とりあえず、コソコソと二人してコンテナの裏やらなにやら歩き
回る。中には警察は入ってきてないみたいだ。

治外法権とか？そんなわけないか。

とりあえず、携帯で連絡してみるも、圏外もしくは電源を切つて
るとのこと。なんでこの非常事態に。どこか地下にで入ったのか？

井筒さん（紺のハイソックス）が何かに気づく。

「吉田くん、何か物音がしますよお？」

んん？そうかな……？って！？

向こうから一筋の光の線が見える。懐中電灯かなにかか？！ 警

察か！？ いかん！見つかる！

あせる僕を、冷静に、むしろおっとり、井筒さん（たまにポニテール）がなだめるように言う。

「ここに隠れましょう」

彼女の指したところには、頑丈そうな巨大な箱？のようなものがちよつとしたお風呂ぐらいの大きさだ。鉄ふたをゴゴゴゴと開ける井筒さん（実は怪力？）。

こ、この中に……？

ピョンつと彼女は迷いなく中に入る。

光は近づいてくる！

くそ！

「南無三！」

俺も中に飛び込むと井筒さん（この鉄ふた何キロあるんだ……？）が天を閉じる。中から器用に。握力90キロぐらいないとできないんじゃないかしら……。

っていうか、上手くやりすごせるだろうか。こんなところで捕まったら洒落にならない。とにかく、上手く彼女だけでも助けなくては。きつと、不安がつてるに違いない。きつと、おそろく。多分。

「大丈夫ですう。吉田くんだけは必ず逃がしますからねえ」

とても心強い一言が飛び込んできた。うん。こんなに浮世離れしてたかな。この天使は。

なんと返事すればいいものか迷っていると、とびつきりグルービーな音が聞こえてくる。

キュン……ズガガガ……キュンキュン……

ああ、これは……テレビなんかで聞いたことある音だなあ。うん。
銃撃戦の音だ。

銃撃戦？

警察が？誰と！？田中たちと！？

ズガガガってマシンガンとかの音じゃないの！？

「ええええ！？なんだなんだ！？」

「銃撃戦のようですねえ」

あくまで天使はクールだ。でも僕はクールなんかでいれない。
ばつと立とうとして頭を打つ。思いっきり……。

「あ、吉田くん大丈夫ですか……」

思いっきり強打した僕は、意識がなくなっていくのを感じる。え
え？俺……ダサくない……？

目が覚めたらそこは、ジャングルだった。

え？

第五話『ここはジャングル読めないハングル』

さて。さてさてさて。一体何が起こったか。
非常に雑なお話した。

僕は心の底からそう思った。カメラとかを探したりした。何かの
テレビ番組に巻き込まれたのかと思ったんだ。

でも、ここまで素人相手に強引に撮影したら次に会うときは法廷
ですぬってなもんだ。

まず、何から話そうか。いや、何から説明してもらいたいか。僕
にもいまいち理解はできてない。

第一に、僕は空港に関する怪談が本当かどうか検証する旅200
8夏に参加したわけである。

第二に、それは我がクラスほぼ全員が集まって行われるビッグイ
ベントだったってこと。

第三に、僕遅刻。待っていてくれたのは大好きな大好きな井筒さ
ん（僕の圧倒的片思い）。

第四に、空港に着いたら警察がグルリと集まってる。超びっくり。
第五に、井筒さん（コスプレとかされたら死ぬ）の機転？で空港

に侵入。

第六に、見つかりそうなので隠れたら銃声。なんか、マシンガン
とかっぱい音。おいおい。

第七に、頭強打。今も怖くて触れない。血が出たらいやだから。
そして…

今。ここは、ジャングルです。ええ。ジャングル。
クールだと思う？

安心して。それでも目覚めてから2時間1分は経過してる。そし

て、今の今まで2時間いっぱい使って大パニックになったから。

そりゃあもう大パニックだよ。叫ぶは暴れるわほっぺをつねるわ…もう何がなんだかしっちゃんかめっちゃか。

でも、どれだけ暴れても…どれだけパニックになってもどれだけ夢である事を祈っても悲しいぐらいにここは…ジャングルなわけですよ。

右を向いても左を向いても茂ってますから。完全に茂ってますから。

とりあえず、いまだに若干夢でないかしらと思ってる僕。いやー、こればかりはねえ。

もう、変な音とかもガンガン聞こえてますから。なんかもう、猛獣ですか？猛獣ですか？これは、猛獣ですか？

あんたらに、想像できるか？

気が付けばジャングルにいるって気持ち。いや、ここはもつと妥協するよ。気が付いたもくそもなくジャングルに來た事あるか？

すごいぞ。湿気。

すごいぞ。虫。

すごいぞ。変な音。

常に何か音がしている。

昔なにかの本かテレビでよんだけど…ジャングルで迷ったら動いたらダメらしい。

この場合自分が迷ってるのかどうかってところに迷う。

もちろん、相当人生に迷ってる感はいなめない。

ガサガサ、ゴソゴソ。そんな音が聞こえる度にビクビクする。

ふと考えると…僕は確かに井筒さん（何気に動き速かった）と一緒にでっかい鉄の箱みたいなのに入ったはずだ。そして頭を打って…ここに。うむ。肝心な部分が全く見えてこない。

一体…なぜ…？ん？井筒さん？

うおおおおおおおおおおお！

僕は気付いた。なんてこった。今まで何故気付かなかった。何故！何故！

井筒さんがいないじゃないか！

これは大変なことだ！

僕はとにかく焦る。そこらへんを走り回る。もちろん、あまり遠くにいかないようにしながら。わきまえながら、走り回る。

僕のことなんてどうでもいい！どうしたらよいんだ！

僕だけジャングルに転送されたのか！？

いやいやいやいや。

転送で。

どうなってるんだ。っていうか、どうしたらいいんだ。

不安でならない。大好きな女の子もおそらくジャングルに連れてこられたんだろう。連れてこられた？誰に？ええい！そんなこと言ってる場合じゃない！

とにかく…これは…、やばいぞ。井筒さんは、おっとりしてる。

それなのにこんなとこに来たら…死ぬかもしれない。いや、空港ではおっとりしながら脅威の行動だったが…。

とにかく、迷っていてもしかたない。どうする？ここは、とにかく闇雲に移動してみるか！？

危険か！？危険もくそもない！井筒さんがどこかで泣いているかもしれないんだぞ！

ここは…俺に…人生最大の選択肢が…キターーーーーー！

第六話『ジャングルの中、食べたい最中』

色々考えた結果、僕の人生の選択肢。最大最悪の選択肢。このまま井筒さんを待つか移動するか。もちろん、移動することに決定。満場一致の採決です。

そもそも、よく考えてみると僕がこうやってここでぐっすり気絶してる間に井筒さんがふらふらとどこかに行ってしまったって迷子になってるのかもしれない。

普通に考えたら女の子がこんなジャングルを一人で歩けるかと思うけど、あの子は浮世離れ具合がA+って感じだから問題ない。むしろ、ジャガーが何かに襲われて大変なことになってるかも！

……ジャガー？

僕はここで一度冷静になることにした。

ここはジャングル。

なんていうか、日本かどうかわからないけど……いつか見たアマゾン川探検のテレビ番組の映像と似てる。

ここは、日本？それとも外国？日本なら……恐れるのは野犬とかいのししとか。熊もか？

外国なら……それこそジャガーやらなにから……モンスターだらけだ。

ここらを、適当に移動するのは非常に危険な匂いがプンプンする……。でも、井筒さんがいないんだからしょうがない。むしろ、危険だからこそ井筒さんを探さなくては！

とりあえず僕は付近をさがし、ほどよい大きさの木の棒をゲットする。

心底、心底サンダルとかで来てなくてよかったと思う。スニーカー万歳。

それにしても、装備してるのが木の棒か……。ロールプレイングゲームなら最弱っぽい武器だな。こんなもので追い払えるのは、

正直野犬（子犬ちゃん程度）ですよ。

まあ、ガタガタ言っても仕方ない。

僕は、とにかくにもジャングルの中を井筒さんを探しに出発することにした。

どのくらい歩いただろうか。恐らく、2分ぐらい。

ここで、一つ結論が出た。

ここは日本じゃない。

だって、見たことないサルとか生き物がそこらへんにいる。

アマゾン探検のテレビでは、こういう動物を発見するのは苦労してたがな……

もしかして、それだけジャングルの奥地に来てしまったってことか！？

いや、まだ……あるいはこういうサファリパーク的なところなのかも。生き物多いし。

とにかく、歩く。

どのくらい歩いただろうか。恐らく合わせて5分ぐらい。

心が折れそうになる。

ふと右を見たらめっちゃめっちゃでかい蛇がいたからだ。

これは噂のアナコンダ先生ではないでしょうか。

アナコンダ先生は幸運にもそっぽをむいていらっしやる。僕は、ゆっくりと。だけど確実にその場を離れることにする。

どのくらい歩いたか。多分、8分ぐらい。

思いのほか果物とかがある。見たことない果実だがおもむろにむしってかぶりつく。思いのほか甘くないし、思いのほかジューシー

じゃないが……食料の確保はサバイバルの鉄則！こういうサバイバルはゲームの知識しかないが……ゲームの知識でなんとかなるってことを思い知らせてやるぜ！

どのぐらい歩いたか。14分ぐらいか。

奇跡が起こる。お腹がめっちゃめっちゃに痛い。さっき食べた果実か……それとも昨日食べたしめ鯖が腐ってたのか……。

しめ鯖といえば……親たちは、心配してるだろうな。

こんなの、ただの行方不明だもん……。

しかし、不安にもなる。うちの家はこうみえて、驚くぐらいのゆるい家なのだ。息子の自主性に任せてるらしい。

昔、一度家出したことがあった。それも、相当な覚悟を決めての家出だ。2ヶ月間、友達の家で暮らした。結果、家に帰ったら何事もなかった感じだった。

おいおいおい。

今回ばかりは警察に言って搜索してもらわないと結構ピンチだぜえ。

なんだかんだと歩いた。もう3時間は歩いたと思う。その間に、携帯がないことに気づいたりヘラクレスオオカブト（仮）を発見したりで、日本じゃないって自信が確信に変わったり携帯がないと時間もわかんないよってなことですよ。

ここがどこかわかんないけど……。とにかくあんなカブト虫は日本にはいない。でも、頭を強打したからって何十時間も気絶してないだろうし……。いや、頭がずきずきする部分は一つじゃない、もしかしたら何回も頭を打ったのか？

とにかく、今自分はどこか外国のジャングルにいる。
なのに、なんだろう。この感じ。

もう、あまりの出来事すぎてちよつとおかしくなってるんだろう。まるで他人事のような感じた。

はぁ……。大丈夫だろうか……。っていうか……。やっぱりあそこですじつとしてたほうが良かった気がする。。。

しかし……。道が舗装されてないとこんなにも歩きにくいものだったとはね。国土交通省の皆さん。本当に、ありがとう。あなた達の工事は無駄ばかりだと思ってたこの高2の馬鹿を許してください。

気が付くと、目の前に湖があった。池っていうよりは湖だ。そのぐらいでかい。

なんとなく、ネス湖だと思ってしまふ。ジャングル、湖ときたら、ネッシーだろ。まあ、そんなわけないか……。

水はとても綺麗そうだ。飲んでも大丈夫かな……。？変な雑菌がわいたりしないかな……。不安にはなるが、仕方ない。飲む。

だって、ノドがからからなのだ。

ガブガブガブガブ……

うまい！なんていうか、軟水だね！？

とりあえず一休憩。ふう……。

湖はびっくりするぐらいにうららかで。思わず、こんなキャンプに来ていたと自分を惑わせる。

魚なんかも泳いでる。途中、色んな果実に手を出したせいかお腹の調子がよくないのであまり空腹感はないが……。いざとなったらこいつらを食えばいいか。

井筒さんはどこにいるんだろう……。っていうか、どこをどうやったらあの箱の中からこんなジャングルへ？

推測してみた。

あの箱は、なんらかのものを外国に運ぶためのもので僕らはそれ

に入り込んでしまった。

それに気づかない馬鹿な飛行場の皆さんはそれを飛行機の中へ。
そして、出発。

運び出される。僕ら。ジャングルの中へ。

中身を見たらああ、大変。人がいるではありませんか。

とりあえず、パニックになつた原住民の人は氣絶してる僕を氣遣つてあそこに寝かし、医者か何かを呼びに行つた。

うむ。

だとしたら……やはり移動したのは大間違いだったわけですね。

まあ、この推測にはいくつもの無理があるけどね。

だいたい、あんな夜中からフライトはしないでしょ。それとも、三日月三晩ぐらいマジで気絶？さすがに、井筒さんがほっとかないでしょう……。

なんだかんだとを考えをめぐらせてると、体中から嫌な汗が吹き出
 てることに気づく。真後ろに、気配がするのだ。

えつと…

まさか……

猛獣さんですか……？

恐る恐る後ろを振り返ると……

ガチャリ。

!?

僕のおでこに、鉄砲を突きつける外人の女の人がいた。

え え え え え え え え え え え え え え え え え え ! ?

第七話『洞窟、好物』

ああ。なんてことだろう。

まさかこんな所で鉄砲頭に突きつけられるとは。

正直、夢にも思っていないませんでしたよ。ええ。

僕に鉄砲を突きつけてる女の人は顔が泥で真っ黒だった。

戦争映画のゲリラ兵のような。そんな感じ。

撃たれたら即死。これがエアーマンとは思えない。

汚れで断定はできないけど多分外人だと思った。

さらにピンチだ。僕は英語が全くわからない。僕は木の棒

を捨てて手をゆっくりとあげる。

悪意はありませんということとを全身全霊敬意すら込めてアピールする。

その女ゲリラは、ぐつと僕の手を掴むと器用に紐で縛り上げた。

もちろんその間僕は太パニックだ。

おしっこも少しはちびったかもしれない。

しかし、この状態でクールでいれるのはきつと鍛え抜かれたエリート兵ぐらいですよ。

僕は鉄砲でつつかれながら移動を促される。

どこへ…？

連れて行かれた先は、入り口は小さいが中は大きな洞窟だった。

ここは？

女ゲリラ（仮）は全く何も喋らない。

洞窟の中は手が縛られた状態では歩きにくかったが、ほどけと口が裂けても言えないし。

なにより英語でなんて言えばいいかが一番わからない。

促されるがままに奥までくる。

ローソクかなにかでライトアップされてるから暗くはなかった。

このまま殺されちゃうのかな…。

涙が出てきた。

せめて、井筒さんに気持ちを打ち明けたかった。

井筒さん…

ぼそりと。つぶやいた。

「はい、なんですかあ？」

正面から場にそぐわない声が拳がる。

い、井筒さん…?!

第8話『ゲリラ、せいや!』

目を疑う。耳を疑う。理由なんていらさないさ。目の前に井筒さんがいるんだから。

井筒さんは、相変わらずジャージ姿だった。

ただ、記憶のそれと違うのは顔は黒を基調にペイントされ、木の葉の冠のようなものを装備していらっしやる。

いつからあなたはソルジャーに…?

井筒さんは、まるでいつも通り。学校で話すように僕に話しかけてくる。

なんでも、事の経緯は単純明快で僕の想像通りと言っても過言ではなかったらしい。

僕らの隠れたあの箱はゲリラの武器を運ぶためのものだったらしい。あの夜中に運び出すはずが警察に嗅ぎつかれたわけだそうなるほど。高校生の軽い悪戯にしては警察がマジだったわけだ。

そして僕らがいることに気づかずに運ばれ…僕は目覚めるたびに頭を打って…今は南米のジャングルだとさ。

おいおい。ありえるのかい?

もはや都合がいいって言葉すらおこがましい。

僕が目覚めないからあそこに寝かしておいて皆さん(ゲリラ)はこの隠れ家に物資を運んでたらしい。

そんでもって僕の様子を見に来たらもぬけの殻。

探してくれたそう。

ちなみに、このゲリラの皆さんは別に反政府ゲリラとかではな

くて、お金で動く傭兵軍団みたいなものらしい。

僕は驚いていた。

この現状に。

なによりあのおつとりした井筒さんが一人でこのゲリラと会話し、僕らを殺さないように話を付けたということ。

目の前でゲリラの皆さんとすでに打ち解けてる感じだし。

夢かとおもって頬をつねりすぎて自傷癖があるのかとゲリラさんたちに心配されたぐらいだ。

ああ、マジなのか。これはマジなのか。

洞窟の奥に案内される。小さなスペース。

「ここがとりあえず私たちの生活スペースらしいですう」

あら、ありがとう。っておい！

言葉にならない言葉を僕がわたたと発していると井筒さんが驚きの言葉を発した…。

それは…

最終回

ここで、話は急遽、火星にうつる。

この頃、火星では、地球を観測するタコ型の火星人が。これは、なんのための観測か。これは、火星のトレンドだった。ただのトレンドだ。

人が、望遠鏡を持って近隣の住宅を舐めるように蹂躪するようにチエックするのと、大差ない。趣味の一環。

タコ型は、地球を見ながら思った。

あの、少年と少女とゲリラたちは、きつともうすぐ死ぬと。

火星、火星、火星、火星はきつと、大きい…。そして、地球の、少年少女たちよ。幸アレ。ただの人々。人々は夢想する。文字に犯され、文字によって縛られた人民たち。何の価値があるのか。資本社会は崩れ去り、社会主義の世の中になる。ああ、マルキニストよ。私は、資本主義が好きだ。

火星人の悲痛な心の叫びは、地球まで届く事はない。ふと目をこらすと、月の近くにエンデバーが見える。このエンデバー…きつと、悪いエンデバー。エンデバーよりも、自分は餃子のほうが好きだ。

この際、餃子というものは我々人類が思っている餃子とは違うものである。おもに、フロンガス主体のなにがし。そんな何かを、食す。彼らにとつて、りんご酢もビリーもH I P H O Pもただのノイズ。用意周到なやつだけが勝つこの地球において、彼らはU M A。時に彼らは世界を滅ぼすかも知れない。円形人。アフリカに未知の文明を置いた種族。それが彼らであるのかどうかは、誰にもわからない。しかし、世界がそれを知ろうとするのなら皆はアカシックレコードに触れるがよい。さすれば、わかる。それすなわち、ロードオブナイトメア。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4666f/>

あなたは殺し屋これは幻か。

2010年10月10日12時58分発行